

令和4年6月27日  
丹後農業改良普及センター

## 農作物の高温少雨対策について

気象庁の発表によると、7月初旬にかけて夏の太平洋高気圧が強い状態が続き、全国的に厳しい暑さが続くとされています。また西日本においては、梅雨の中休みが長く7月中旬に梅雨明けを迎える見込みであることから高温による農作物への影響や水不足の発生が懸念されています。

については、以下の事項を参考に、農作物の管理と作業時の健康管理等について留意願います。

### 1 水稻

- (1) 生育前半の高温は分けつの発生過剰を促す場合があるため、中干しによって適宜過剰分けつを抑制する。
- (2) 出穂期は生育期間を通じて最も水を必要とする時期であり、この時期の水不足は稔実を著しく不良にするため、湛水管理に努める。
- (3) 地域全体で計画的な用水管理を心掛け、ほ場が水不足にならないように注意する。

### 2 大豆（紫ずきん含む）

- (1) ダイズ及び紫ずきんは、7月下旬頃から開花期を迎える。開花期以降、着莢や子実肥大に水分を必要とするため、土が乾燥しないように早朝や夕方に畝間かん水を行う。この時期の水不足は、落花・落莢を促進し、稔実莢数や一莢粒数の減少を招くため注意する。
- (2) ただし、畝間に長時間滞水が続いた場合、酸欠等で根が弱り病害発生や開花期の落花を助長するため、明きよ等により表面排水を促す工夫を施す。
- (3) 開花期以降、子実の肥大に伴ってカメムシ類や子実害虫の被害が増えるため、若莢期から7～10日間隔で計4回程度防除を行う。特に乾燥条件下でハダニ類やハスモンヨトウの発生が増加するため、ほ場を観察し早期防除に努める。

### 3 野菜・花き

- (1) かん水は生育状態等を考慮しつつ、早朝・夕方に実施する。施設内でのかん水は湿度が高くなりやすくなることから、曇天時には日中に換気するなどして湿度を下げる。また、地温上昇の抑制や土壌水分の保持を図るため、適宜マルチや敷わら等を活用する。
- (2) 除草や下葉の除去等によって、ほ場内・施設内の風通しを良くする。
- (3) 施設栽培は、妻面・側面を開放するとともに、遮光・遮熱資材等を使用し、施設内の温度上昇を抑制する。遮光資材は、果実の日焼けや葉やけの防止にも有効である。循環扇は、局所的な高温・高湿空気の滞留を防ぎ、室内温度・湿度の均一化等の効果が期待できる。
- (4) ハダニ類、アザミウマ類等が多発しやすいので、発生初期の防除に努める。

### 4 果樹

- (1) 高温で土壌が乾燥すると、葉などからの蒸散作用が抑えられ高温障害が助長されるため、十分なかん水を行う。この際、時間をかけてかん水し、地下に水を浸透させる。
- (2) 水分の競合を避けるため、園内の除草を行う。土壌の表面の乾燥を防ぐため、刈り取った草を利用した敷草やマルチを行うことも検討する。
- (3) ハダニ類・カメムシ類の防除を行う。なお、間もなく収穫を迎える樹種では、農薬の「収穫前日数」に十分注意する。

### 5 茶

- (1) 干ばつ害を軽減するため、うね間や株元の敷草等により、土壌水分の保持に努める。
- (2) 気温が高い時期にはハダニやヨコバイ、アザミウマ等の害虫の被害が大きくなりやすいため、発生を確認し、的確に防除する。また、この時期は二番茶の摘採時期にあたるため、摘採予定の園については農薬の「収穫前日数」に注意する。
- (3) 製造にあたっては、高温及び多湿条件で生葉が蒸れやすいため摘採後の生葉は速やかに茶工場まで運搬する。生葉をコンテナ保管する際は極力低温で保管できるように留意する。

### 6 作業者の熱中症対策等

- (1) こまめに水分と塩分を補給するとともに、身体を適度に冷やすことができる冷たいタオル等を備える。
- (2) 作業中の温湿度の変化がわかるよう、温度計、湿度計等を設置する。

- (3) 日陰などの涼しい場所に休憩場所を確保し、十分な休憩時間を確保する。
- (4) 可能であれば朝夕の比較的涼しい時期に作業を行い、気温の高い時間帯の作業を避ける。
- (5) 透湿性、通気性に優れた作業服や空調服等を着用する。

## 7 その他：今後の台風発生について

気象庁の6月10日付け発表によると、現在は「ラニーニャ現象※」が発生しており、この状態が夏前半にかけて継続する可能性が高いとされています。

ラニーニャ現象下では台風の寿命や勢力は控えめであるものの、台風の発生地点が北から西にずれることで、発生後早期に日本列島に近づく台風が増える可能性があると言われています。気象情報に留意いただき、今後の台風発生等に注意願います。

※太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海水水温が平年より低い状態が続く現象